



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

和魂 WAKON YOSAI 洋才

ここは館長の部屋

一月号に相応しい話題をということで、年頭の日本独特の文化である年賀状について調べてみた。

書面による年始の挨拶交換の始まりについては、確かな記録が残っていないが、平安時代後期に藤原明衡が著した「雲州消息」という書簡の文例集の中に、年始の挨拶を含むものが幾つか収められていることからすれば、貴族や公家の間では千年ほど前から書面で挨拶が交わされていたことが推測されること。その後、この習わしが長い歴史の中で育まれ、江戸時代に入ってから飛脚制度の

龍馬と年賀状

発達に伴って、次第に各地に広まって行ったようである。そして、百五十年前に前島密が欧米に学んで近代郵便制度を創設、続いて郵便業書の発行や年賀郵便の特別取扱などを経て、現在の姿が出来上がってきたとされている。

今号の四文字熟語は「和魂洋才」としたが、年賀状は、日本の精神や文化が西洋の制度を取り入れることで発展を遂げてきた典型的な事例の一つではないだろうか。

昨今、電子メールや各種のSNSでのメッセージ交換が大きく増加し、高齢者を中心に年賀状のやり取りを断捨離する方が増えてくると、年賀状離れが進みつつあ

る。とはいえ、私達にとつては、国民的行事として、また、年初の風物詩として欠かせない慣習であることに変わりない。

龍馬と年賀状のその一。筆まめで、手紙の達人とされる彼ならば、残された書簡の中には、年始の挨拶が幾つかあるだろうと思いついたが、これまでに確認されたものは唯一つとのことである。それは、慶応3年1月3日付の木戸孝允宛の書簡で、冒頭に、「改年賀事御同意 御儀奉_レ存候」とある。この件は、一昨年の記念館の年賀状に使ったので、御記憶の方もいらっしゃるのではないだろうか。飛脚制度が整ってきたとはい

え、多くの知り合いに御挨拶するには費用が掛かり過ぎたのか、はたまた、脱藩の身、幕府に警戒される立場ゆえに年始の挨拶を出すことが憚られたのか。それにしても、せめて、乙女姉さんをはじめ大好きな家族宛がもつとあればと思ったのだが。

龍馬と年賀状のその二は、平成の終わりとともに10回目をもって一区切りとなった企画の「龍馬に届く年賀状」である。これは、全国のファンの皆様が、龍馬に向けた思いや誓い、あるいは、十年後の自分や家族など大切な人へのメッセージを綴った龍馬宛の年賀状を桂浜の龍馬像の前で受け取

り、その後、記念館内の「時の階段」と名付けられたケースに収めて封印し、十年後の3月24日(龍馬脱藩の日)に開封して、差出人の方々が御来館した際に年賀状をお返しするというものである。

「龍馬街道実行委員会」や日本郵便の関係者の方々とともに取り組んできた結果、四千通を超える年賀状が寄せられており、いよいよ今年から返却が始まることとなる。十年前の自分を振り返り、今の自分を見つめ直してみる貴重な機会にもなると思う。読者の中の「差出人」の方々には、是非御来館いただきたい。

高松清之



「長宗我部遺臣と土佐の郷士」展 開催中!

昨年12月21日より、企画展「長宗我部遺臣と土佐の郷士」展を開催している（4月5日まで）。このようなテーマの企画展は、当館では初の試みである。長宗我部時代を取り上げたことに驚かれるかもしれないが、実は龍馬は、この時代と浅からぬ因縁があるともいえる。なぜ、龍馬記念館で長宗我部なのか…本展のどころを紹介したい。

土佐の戦国と幕末

高知県（土佐国）の歴史をやや趣味的な視点から見れば、人気を二分するといつてよい戦国時代と幕末の両方に著名な人物を持つ、全国なかでも希有な県であると思う。いうまでもなく、前者は戦国大名長宗我部元親で、後者の代表は坂本龍馬ということになるだろう。しかも、龍馬はじめ多数の志士を輩出した土佐藩も、領主は有力大名山内氏である。戦国時代と江戸時代で統治する大名家が異なるという条件を加えれば、上記の希少性はさらに高まる。

この領主の交替が、本展のテーマの重要なポイントである。土佐国では、関ヶ原の戦を境として、長宗我部氏が改易となり、新たに山内一豊が一国を拝領した。その後、長年（結果的に江戸の全時代）にわたって山内氏による統治が続いたことで、人々（江戸時代を生きた人、そして現代の我々も）にとって長宗我部時代

が「旧時代」であるとの観念がより強まったのではないだろうか。このような時代の「断絶」の観点を、今回の企画展の出発点としてみたい。

一領具足から郷士へ

幕末の志士坂本龍馬が郷士の家に生まれたことはあまりに有名である。この郷士の元をたどると、一領具足と呼ばれた長宗我部氏の家臣にまでさかのぼる（ただし、坂本家は一領具足の子孫ではない）。一領具足は、平時は農業に従事し、戦時には従軍する、兵農未分離の時代を象徴する兵士として理解される。主家の改易後、彼らを郷士として再雇用したのが、江戸時代初期の藩政を主導した野中兼山である。郷士は、武士身分でありながら、その第一の役割は耕地の開墾と維持であり、実態は百姓に近かった。泰平の時代、軍役こそ限定的だったものの、郷士の基本的性格は一領具足のそれを引き継いでいる。

このような「連続」性が、逆に山内氏側の視点からは「断絶」を生んだとも考えられる。一領具足にルーツを持つ郷士は、旧領主長宗我部の遺臣であり、山内の家臣からすれば肯定し難い存在である（と考えられたはず）という観念である。それとは別に、郷士自身も、一領具足にルーツを持つことを意識する一方、その姿とはかけ離れた郷士の現実にジレンマを抱えた。長宗我部時代の一領具足と山

内時代の郷士との間に「断絶」を見たのである。本展では、この「一領具足から郷士へ」という観点を軸に、新旧の時代の「連続」と「断絶」という両面を考える。

本展のみどころ

本展の内容を、三つの段階として紹介したい。その第一は、長宗我部氏の治世、一領具足の時代である。浦戸城（長宗我部氏最後の居城で、当館はこの跡地にある）にまつわる資料や、この地域に伝わる貴重な長宗我部関係資料などを展示する。第二は、江戸時代、長宗我部遺臣が郷士として取り立てられ、郷士が土佐の社会に定着するとともに、次第にその性格を変えていった時代である。郷士の種類がさまざまあったことや、坂本家の郷士としての特徴などを、資料を通じて考える。そして第三は、郷士が幕末の志士として活躍した時代である。龍馬をはじめ、幕末の郷士はなぜ政治活動に身を投じていったのか、その背景を探るとともに、彼らの実績を紹介する。約300年という長いスパンの内容を、企画展示室に詰め込んだ。

龍馬記念館ならではの「長宗我部」展であり、「郷士」展である。ぜひ多くの方に足を運んでいただきたい。

高山嘉明

■関連企画

講演会「長宗我部氏と浦戸城」

高知県立埋蔵文化財センター所長
松田 直則氏

日時：2月15日（土）13時30分～ 新館1階ホール
要事前申込（無料）

担当学芸員によるギャラリートーク

①1月18日（土） ②3月21日（土）
いずれも14時～ 企画展示室
申込不要（無料、要観覧料）

高知県立坂本龍馬記念館 令和元年度企画展
長宗我部遺臣と土佐の郷士

令和元(2019)年
12月21日(土)

令和2(2020)年
4月5日(日)

■観覧料 一般700円(20歳以上の団体560円)
※高知県立坂本龍馬記念館学芸員によるギャラリートーク、要事前申込
観覧料は別途加算(有料) 電話予約は不要(要観覧料) 観覧料は別途加算(有料)

■開館時間 9:00~17:00(最終入館16:30) 公休中無休
■観覧料 一般700円(20歳以上の団体560円)
※高知県立坂本龍馬記念館学芸員によるギャラリートーク、要事前申込
観覧料は別途加算(有料) 電話予約は不要(要観覧料) 観覧料は別途加算(有料)

●講演会「長宗我部氏と浦戸城」
講師 高知県立埋蔵文化財センター所長 松田 直則氏
日時 2月15日(土)13:30~15:00 新館1階ホール
定員100名(要事前申込・先着順) 無料
※観覧料は別途加算(有料) 電話予約は不要(要観覧料) 観覧料は別途加算(有料)

●担当学芸員によるギャラリートーク
日時 ①1月18日(土) ②3月21日(土)
いずれも14:00~ 企画展示室
申込不要(無料) 要観覧料
※観覧料は別途加算(有料) 電話予約は不要(要観覧料) 観覧料は別途加算(有料)

高知県立坂本龍馬記念館
〒781-2222 高知県立坂本龍馬記念館
TEL 088-834-0001 FAX 088-834-0019
http://ryoma-kankou.jp
https://ryoma-kankou.jp

龍馬佩用の脇差ご寄贈

龍馬が特に愛した脇差が龍馬記念館所蔵へ

このたび当館に貴重な資料のご寄贈があった。龍馬佩用の脇差「備前長船勝光宗光」である。刀そのものが名刀であり、龍馬ゆかりのものとして龍馬書簡に匹敵する、あるいはそれ以上の龍馬遺品である。ご寄贈者への感謝の意とともに紹介したい。

佩刀出現の経緯

この龍馬佩刀は、昭和4（1929）年5月に東京・青山会館（当時）で開催された『土佐勤王志士遺墨展覧会』（郷土坂本家七代・坂本弥太郎出品）での展示以来、90年近く世の中から姿を消していた。

今から14年前の平成17（2005）年、私は龍馬ゆかりの坂本家（札幌市）で、同家所蔵の龍馬佩刀三振が写る古写真を見つけた。そのうち二振は昭和6（1931）年に恩賜京都博物館（現・京都国立博物館）に坂本家から寄贈された「吉行」「埋忠明寿」であることを、所蔵する京都国立博物館の宮川禎一氏とともに確認した。しかし、残る一振の所在は分からなかった。

その後、平成25（2013）年9月に所蔵者からの連絡により、私は刀の所在を知ることとなった。2年を経た平成27（2015）年6月に所蔵者立会いの下、私は宮川氏とともに刀の確認をした。古写真に写っていた「備前長船勝光宗光」であり、来歴ともに龍馬佩刀であることは間違いなかった。

寄贈を受けた龍馬佩用の脇差

同時に、同年10月からの担当企画展「龍馬の良き理解者」坂本家・家族の「絆」展への出展を快諾いただき、「土佐勤王志士遺墨展覧会」以来87年ぶりの展示をすることができた。この年は坂本龍馬生誕180年にあたり、同展開催期間中の11月1日から翌年1月3日までの佩刀公開は大きな話題を呼んだ。

その後、京都国立博物館特別展覧会「没後150年 坂本龍馬」（2016年10月）や、当館の県外巡回展（2017年1月）、及び当館特別展「維新十傑展」（2019年10月）で展示、衆目を集めたことは記憶に新しい。

刀について

この脇差は、今から510年余り前の室町末期。備前長船刀工流派のうち末備前の名工、勝光と宗光の合作。大正5（1916）年11月の坂本中岡両先生五十年祭では「龍馬幼時佩刀」として展示された。また、弥太郎の記録によると「此刀ハ龍馬ガ特ニ愛セシモノ也」とある。目利きであり、刀好きであったという龍馬の原点とも言える刀であろう。

銘は、表に「備前國住長船二郎左衛門尉勝光左京進宗光」。裏に「永正二年八月吉日」とあり、刃長は52.3cmである（永正二年は1505年）。

勝光も宗光も室町時代中期以降江戸時代までの「末備前」と分類される刀匠たちの中で、最も位の高い刀匠の一人である。中でも勝光は応永（1394～1428）の頃から代々勝光を名乗る名跡で、室町時代中期の備前長船鍛冶の頭

領をしていた。父右京亮勝光が早世した後、後継ぎとして二郎左衛門尉勝光が一家を率いて、宗光が叔父として後見して支えたと考えられ、甥と叔父の二人による合作は少ないため貴重な刀である。

大正2（1913）年末、坂本家は居住していた北海道釧路市で大火に遭い、家財を焼失した。当時同家にあったこの脇差も被災したが、比較的早い段階で救出されたため、長時間焼けた「吉行」ほどの損傷はなかった。

所蔵者について

龍馬佩刀の所蔵者は、自由民権家坂本直寛の長女直意と婿養子弥太郎の三男正幸氏のご遺族である。ご両親から受け継いだ佩刀についてこのたび、「坂本龍馬のものは私（わたし）のもの、つまり個人が所有すべきものではありません。家族合意の下、龍馬記念館において所蔵し、永く伝えていただきたい」と寄贈のお申し出があった。氏名等の公表はしない。

寄贈を受けた当館では、大切に保管管理し後世に伝えていくこと。展示などを通じて多くの方々に知っていただくこと。龍馬研究を深めていくことなど心掛けてつもりである。

弥太郎夫妻は、三男に龍馬佩用の脇差を、弘松家養子となった四男に養子問題や「吉行」についての記述がある龍馬書簡などを渡しており、それぞれの子どもたちへ託した思いが想像できる。弥太郎夫妻や相続を守って来られた方々の思いもまた大切に継承していきたい。

前田 由紀枝

「維新十傑―創造・行動・志―」展

を終えて

先日、12月10日に特別展が終了しました。当館にとっては初めての国指定重要文化財の展示であり、展示中も気の抜けない緊張感があった。本来重要文化財の展示は、一年前に計画していたが、新館が開館して半年という時期であり、展示ケース内の環境が整わず、断念した経緯があった。その後、環境整備を続けたものの、4月の段階でまだ有害物質の量が基準値を超えており、なかなか先行きの見えない状況が続いていた。独立行政法人国立文化財機構・文化財活用センターの先生方などにアドバイスを頂きながら改善し、文化庁の許可を頂いたのが8月下旬で、なんとか10月5日のオープンに間に合った。そのため、広報は9月以降となり、遠方の方の中には、予定を組み込めなかった方もおられ、申し訳なかった。しかし、重要文化財の資料を展示できたおかげで、内容は充実したものとなり、多くの方に満足していただけだと思う。また、現存する龍馬の佩刀と伝わる5振りを揃って展示することは、ここ数年思い描いていたことだったので、実現できて良かった。

近年、刀は大きな注目を集めており、目の肥えたファンが多いので、特に展示方法には気を配った。スポットライトで刃文がよく見えるように何



維新十傑展

度も調整したが、気を配ったのは、車イスの方も刃文を見られる高さや角度である。車イスに乗って角度を決めたため、健常者にとっては腰をかがめなければ見えない状態で、多くの方が苦労されていた。今後は、よりよい展示方法がないか、他館にリサーチする必要性がある。

最後に、今回音声ガイドを、高知出身の声優・濱健人さんに依頼した。これが大変素晴らしいものとなり、普通の解説文にも関わらず、濱さんが読むと魂がこもったように感じられ、改めて声優の力を思い知った。今後も音声ガイドの充実を行っていききたい。

三浦夏樹

「龍馬まつりin記念館」

好評のうちに終了！

龍馬生誕の地である高知市では、誕生日である11月15日に「龍馬生誕祭」が催されます。(ちなみに、龍馬は誕生日と同じ日に亡くなっていますが、逝去地である京都市では「墓前祭」が行われます。)同日に近い日曜日には、桂浜で行われる恒例の「龍馬まつりin桂浜」にあわせて、当館でも「龍馬まつりin記念館」と銘打って、館内で様々なイベントを開催しました。

今年の目玉イベントは、奈路道程さん(大阪市在住・高知県出身)による「似顔絵コーナー」。本館のイラストを描いた奈路さん描きおろしの「維新十傑」のイラスト展を「海のみえる・ぎやらりい」で開催していることから、来館者の似顔絵を描いていただけでなくイベントを行うこととなったのです。おひとりおひとりに向き合い、4、5分で素早く仕上げていきます。デフォルメされているにもかかわらず、その人の特長を掴んで描き出した作品を手「家宝にします！」と宣言する人もいたようです。



河村章代

本館では、地下2階の「幕末写真館」では、(当館にありそうで、実はない)「龍馬の衣装で龍馬と記念撮影！」やチケットやチラシを使ったオリジナルの「しおり作り」などのミニコーナーの他、本館内各地に設置したスタンプを押していくと、図柄が完成する「重ね捺しスタンプ」なども好評でした。

企画展を開催すると、一般の方から企画展のテーマに関連する情報が寄せられることがある。わざわざ担当芸員まで知らせてくださるのはありがたいことである。昨年の「大義と忠誠の戊辰戦争」展開催中に、ある方から教えられた山村弥久馬という土佐人のことを、ここで少し書いてみたい。

これまで名前も聞いたことがなかった山村弥久馬という人物。我々が普段参照する『高知県人名事典』（高知新聞社発行、高知市民図書館発行の二種類がある）にはいずれも掲載されていない。また、高知に墓があれば載っている可能性のある山本泰三『土佐の墓』にもない。現在の室戸市出身のようであるが、『室戸市史』にも見られない。いよいよ無名の人物かもしれないが、知らせてくださった方は『山村彌久馬小伝』という小冊の存在と所蔵先（高知市立自由民権記念館）も併せて教えてくれた。

この小冊から彼の人生を紐解いてみよう。文久3年（1863）安芸郡津呂村（現室戸市）の網元の家に生まれた山村は、15歳で上京し、海援隊にも属していた中島信行の書生となる。その後東京師範学校に進んだ山村は教育者となり、各地の中学校や師範学校で教鞭を執る。盛岡中学校時代には、のちに歌人として知られることとなる石川啄木が生徒として在籍し、啄木の退学願を校長として受理するに至っている（明治35年）。

なぜ山村弥久馬のことを戊辰戦争展の開催中に知らせてくださったのか。理由は土佐人である山村と会津の深い関わりにある。前掲の小冊によると、山村は中島信行から、会津戦争の時、家老・西郷頼母の娘が自害しようとして死にきれないでいる場面に遭遇し、「敵か味方か」と問われ、「味方だ」と答えて介錯したという話を聞き、会津の婦女子の節操の高さを知った。また東京師範学校時代には、校長の高嶺秀夫（元会津藩士）からも、会津の婦女子や白虎隊の壮烈な最期などを教えられた。山村は「会津こそわが教育者として赴任すべき地である」と決め、中等師範学校を卒業すると同時に、設立されたばかりの若松中学校に赴任したという（明治18年）。

「大義と忠誠の戊辰戦争」展のコラムでも紹介したとおり、西郷頼母の娘を中島信行が介錯したという有名な逸話については、中島が戊辰戦争に従軍していない可能性が高いため、未だ疑問を差し挟む余地がある。経緯はともあれ、山村は戊辰戦争時に武家としての生き方を貫いた会津人に強い感銘を受け、最初に赴任した若松中学校が廃校になって山形や高知へ移ったのち、明治29年に会津尋常中学校に校長として再度赴任した。その後、盛岡や福山での勤務を経て、教職を退いた後は会津に落ち着き、最終的には本籍地も「若松市（当時）」になっている。前掲の小冊によると、山村の妻タツは、山村が最初に若松中学校に赴任した時に知り合った会津の女性で、廃校によって会津を離れるさい、妻の母から「タツは一人娘だから将来は会

津に来てほしい」と言われ、約束を守ったのだという。山村はタツとの間に四男一女をもうけ、大正13年に会津で没した（62歳）。墓は白虎隊自刃の地である飯盛山にあるという。150年を経た今も、戊辰戦争で武士の義を貫いた会津人に心を寄せる人は多い。明治時代の土佐に、既にそうした人がいたとは意外なことであった。次に会津に赴く機会があれば、ぜひ山村の墓を訪ねてみたいと思っている。

参考文献：三留昭男『山村彌久馬小伝』（高知市立自由民権記念館所蔵）



山村弥久馬の墓がある会津・飯盛山からの眺め

龍馬の手紙

05

露の命ハはかられず
先々御ぶじでをくらしよ
（推定慶応二年一月二十日 姪春猪宛
／北海道坂本龍馬記念館蔵）

坂本龍馬は、維新回天の原動力となった英雄としての側面が強調されがちだが、素朴な家庭人としての一面も魅力的だ。同志に宛てた手紙と違い、親族に宛てた手紙の中の龍馬は、時に人懐こい弟、あるいは優しい叔父としての一面をのぞかせる。

私が大好きなこの手紙は、かつて慶応三年一月二十日付のものと考えられていたが、現在は京都国立博物館・宮川禎一氏による慶応二年説がほぼ定説となっている。この日は、時あたかも薩長同盟締結前夜であり、興奮と緊張さめやらぬ龍馬は、眠れないまま池内蔵太家族宛の手紙と共にこの手紙を書いた。大半は年頃の春猪を辛辣にからかった内容だ。

「この頃は、あばた顔をおしろいで塗りつぶしているんだろう」、「おまえは性格がきついから、男は皆逃げ出してしまふので心配などしてはいない」といった調子である。とは言え、それはとりもなおさず春猪が気の置けない親しい間柄であったからに違いない。この手紙を読んだ春猪は、笑いながらもほっぺたを膨らませたことだろう。しかし、最後のくだりは秀開気ががらりと変わる。

「私も、もし死ななければ、四、五年のうちには帰るかもしれないが、いつどうなるかはわからない。先々無事に暮らしていくんだよ」

この手紙は、薩長同盟締結を目前に控え、自分の身に危険が迫っていることを察した龍馬が遺書がわりに書いたものと言われている。実際、龍馬は三日後に寺田屋で幕吏に襲撃されている。「露の命ハはかられず」（朝露のように、自分の命もいつ消え失せてしまうかわからない）という文学的な表現に続く、「先々お無事でお暮しよ」という言葉に込められた龍馬の切ない心情は察するに余りある。

三輪貞治
（北海道坂本龍馬記念館館長）

私の おすすめ No.5

本館

ミュージアムショップ
当館オリジナルの龍馬グッズ
がズラリ！

今回は、本館1階出口にあるミュージアムショップを紹介しましょう。

平成30年4月のリニューアルオープン時に、本館2階から移り以前より広く新しいショップとして誕生しました。

当館限定の龍馬オリジナルグッズをはじめ、幕末関連書籍、企画展の図録等、ここにしかない商品150点余りを販売しています。ショップ受付で

龍馬への熱い想いととも、「こんなものがあれば、いいですね!」というお声をたくさん頂戴し、今後の商品作りに役立てたいと思っています。



新館へ常設展「企画展」ジョン万展」そして本館へと続く「龍馬タイムトンネル」の最後に、自分への記念品として、ご家族やご友人へのお土産に、又 幕末、龍馬研究の一助として、是非お立ち寄りください。

中平文

拜啓 龍馬殿

167通

令和元年9月21日〜12月20日

最近28歳になりました。公務員をしていますが、夢は漫画家です。龍馬さんのお言葉「世の人は、われをなんとも いわばいえ 我が成すことは 我のみぞ知る」に感動を覚えました。私は3月で公務員を辞めます。漫画家になってみせます。

「龍馬がゆく」に出会いあなたを知って43年間。あなたに憧れて、あなたの背中を追いかけてきた私です。しかしながら未だに小さな事でもよく悩む性格は変わらないままです。きつと生涯 あなたのような豪快で懐の深い生き方に憧れ続けることと思えます。これからもう年に数回は、桂浜で太平洋に向かって雄々しく立ち向うあなたに逢いにきます。あなたは、生涯、私の人生の師です。

さかもとりようまたたかいつづけてくれてありがとう。

心を打たれました。亡くなられていなければ一緒に飲みに行きたかったです。いろいろな人々と関わりを持てる人望の厚さに感動しました。

今の土佐は平和です。でも台風でかつら浜の海が荒れています。でも、土佐は自ぜんが多くて、ほくにとつて幸せなところな感じです。ここまで幸せになったのは坂本龍馬さんたちのおかげです。ありがとうとつづいてください。これからも見守ってください。

大好きな龍馬へ。今日は龍馬のために、わざわざ福岡県から7時間かけて高知まで来ました。とても楽しみにしていたので、「龍馬ノート」や本を6さつ読み、自分なりに、龍馬のことをまなび、知りましたが、ここにきてあらたな龍馬を知ることができ、まだまだ、自分が知らない龍馬のことをまなびたいし、あいしつづけてください。

私が33歳の時に人生最大の危機に直面していた頃、本で坂本龍馬を知り激しい感動におそれ胸に7才になった。苦難の連続つらい人生を渡ってきたが心折れない強く生きてこられたのは坂本龍馬のおかげです。ありがとうとつづいてください。

私が33歳の時に人生最大の危機に直面していた頃、本で坂本龍馬を知り激しい感動におそれ胸に7才になった。苦難の連続つらい人生を渡ってきたが心折れない強く生きてこられたのは坂本龍馬のおかげです。ありがとうとつづいてください。

私が33歳の時に人生最大の危機に直面していた頃、本で坂本龍馬を知り激しい感動におそれ胸に7才になった。苦難の連続つらい人生を渡ってきたが心折れない強く生きてこられたのは坂本龍馬のおかげです。ありがとうとつづいてください。

私が33歳の時に人生最大の危機に直面していた頃、本で坂本龍馬を知り激しい感動におそれ胸に7才になった。苦難の連続つらい人生を渡ってきたが心折れない強く生きてこられたのは坂本龍馬のおかげです。ありがとうとつづいてください。

私が33歳の時に人生最大の危機に直面していた頃、本で坂本龍馬を知り激しい感動におそれ胸に7才になった。苦難の連続つらい人生を渡ってきたが心折れない強く生きてこられたのは坂本龍馬のおかげです。ありがとうとつづいてください。

芸人を目指して生きています。僕のこの先の人生は僕しか分らない。見て下さい。龍馬さん。P・S 海援隊で好きな歌は母に捧げるバラードです。

前略 今また日本は困難を迎えております。貴殿の如く立ち上がるべきですが、中々です。よくもまあ亡くならぬまで、たったの五年で日本を洗濯して頂きました。何とか、その日本を次世代に引き継ぎたく候也。

龍馬殿 貴方に負けん漢になるさ！見守つちよってつかさい。

もっと生きてほしかった。

龍馬さん、ようやく高知に来ることが出来ましたよ。中学6年の時、英語の授業で「英文で自己紹介」というものがあり、一文目に「want to go Ryoma Museum.」と書いたことを思い出しながら書いています。自己紹介なのに、龍馬さん記念館に行きたい、とまず書いてしまつたあたり、私もすいぶん龍馬クレイジーだなあと感じています。えへんえへん。龍馬さんと同じ年齢になったものの、未だに大人とは成人とは？など考えてしまいます。そんな小難しいこと考えんと、シャモ鍋一緒に食おうぜよ！と言われたいな。また来ます！ありがとう！

初めて土佐に来ました。坂本龍馬という人の生きた道を生まれ育った場所に来て知る事、ふれる事が出来たこと、とても楽しくたことです。東京に生まれ育った私にとって高知の歴史、土佐を愛した龍馬さんの心(まご)が今も色あせる事なく息づいている事を肌で感じとり、まるで目の前で日本が変わっていくの見てる様でした。また、時間を作り、坂本龍馬殿が愛しつづけたこの高知へ来たいと思います。高知を好きになりました。ありがとう、龍馬。

龍馬さん、こんにちは。今から13年前の2006年の夏に父と訪れてから2度目の訪問となりました。そこには明目を夢見る龍馬さんの銅像は、私の人生において大変大きなインパクトがあります。若い頃から剣術を極めて

龍馬さん、こんにちは。今から13年前の2006年の夏に父と訪れてから2度目の訪問となりました。そこには明目を夢見る龍馬さんの銅像は、私の人生において大変大きなインパクトがあります。若い頃から剣術を極めて

龍馬さん、こんにちは。今から13年前の2006年の夏に父と訪れてから2度目の訪問となりました。そこには明目を夢見る龍馬さんの銅像は、私の人生において大変大きなインパクトがあります。若い頃から剣術を極めて

龍馬さん、こんにちは。今から13年前の2006年の夏に父と訪れてから2度目の訪問となりました。そこには明目を夢見る龍馬さんの銅像は、私の人生において大変大きなインパクトがあります。若い頃から剣術を極めて

龍馬さん、こんにちは。今から13年前の2006年の夏に父と訪れてから2度目の訪問となりました。そこには明目を夢見る龍馬さんの銅像は、私の人生において大変大きなインパクトがあります。若い頃から剣術を極めて

龍馬さん、こんにちは。今から13年前の2006年の夏に父と訪れてから2度目の訪問となりました。そこには明目を夢見る龍馬さんの銅像は、私の人生において大変大きなインパクトがあります。若い頃から剣術を極めて

土佐を憂い、日本の将来について考えていた生き方を見て、私も現在の置かれてる立場から一歩先のことを描きながら、生きていこうと思えました。もし、また今後仕事や生き方に悩むようなことがあれば、龍馬さんであればどう考えるのかと思つて強く生きていこうと思えました。

今日は龍馬さんの生誕をお祝いするため、はるばる江戸からやって参りました。生家跡には、たくさんのお花がたむけられていました。令和となった現代でも、あなたの功績は高く評価されています。今回、私はあなたのことをもっと知りたくて、事前にたくさんの本を読みました。あなたが残した140通近い手紙も、架空のヒーローだった龍馬さんがリアルに存在したのだと手紙を読んで感じました。あれらの手紙は、個人宛ではあるけれど、実は後世に、あなたが生きた。今、を伝えるため、本当は多数宛に書いたものではないかと思えてなりません。今の世は、龍馬さんが描いた「ニッポン」になっていますか？それとも又、洗たくしたいニッポンですか？尋ねてみたいです。

今日は龍馬さんの生誕をお祝いするため、はるばる江戸からやって参りました。生家跡には、たくさんのお花がたむけられていました。令和となった現代でも、あなたの功績は高く評価されています。今回、私はあなたのことをもっと知りたくて、事前にたくさんの本を読みました。あなたが残した140通近い手紙も、架空のヒーローだった龍馬さんがリアルに存在したのだと手紙を読んで感じました。あれらの手紙は、個人宛ではあるけれど、実は後世に、あなたが生きた。今、を伝えるため、本当は多数宛に書いたものではないかと思えてなりません。今の世は、龍馬さんが描いた「ニッポン」になっていますか？それとも又、洗たくしたいニッポンですか？尋ねてみたいです。

今日は龍馬さんの生誕をお祝いするため、はるばる江戸からやって参りました。生家跡には、たくさんのお花がたむけられていました。令和となった現代でも、あなたの功績は高く評価されています。今回、私はあなたのことをもっと知りたくて、事前にたくさんの本を読みました。あなたが残した140通近い手紙も、架空のヒーローだった龍馬さんがリアルに存在したのだと手紙を読んで感じました。あれらの手紙は、個人宛ではあるけれど、実は後世に、あなたが生きた。今、を伝えるため、本当は多数宛に書いたものではないかと思えてなりません。今の世は、龍馬さんが描いた「ニッポン」になっていますか？それとも又、洗たくしたいニッポンですか？尋ねてみたいです。

今日は龍馬さんの生誕をお祝いするため、はるばる江戸からやって参りました。生家跡には、たくさんのお花がたむけられていました。令和となった現代でも、あなたの功績は高く評価されています。今回、私はあなたのことをもっと知りたくて、事前にたくさんの本を読みました。あなたが残した140通近い手紙も、架空のヒーローだった龍馬さんがリアルに存在したのだと手紙を読んで感じました。あれらの手紙は、個人宛ではあるけれど、実は後世に、あなたが生きた。今、を伝えるため、本当は多数宛に書いたものではないかと思えてなりません。今の世は、龍馬さんが描いた「ニッポン」になっていますか？それとも又、洗たくしたいニッポンですか？尋ねてみたいです。

今日は龍馬さんの生誕をお祝いするため、はるばる江戸からやって参りました。生家跡には、たくさんのお花がたむけられていました。令和となった現代でも、あなたの功績は高く評価されています。今回、私はあなたのことをもっと知りたくて、事前にたくさんの本を読みました。あなたが残した140通近い手紙も、架空のヒーローだった龍馬さんがリアルに存在したのだと手紙を読んで感じました。あれらの手紙は、個人宛ではあるけれど、実は後世に、あなたが生きた。今、を伝えるため、本当は多数宛に書いたものではないかと思えてなりません。今の世は、龍馬さんが描いた「ニッポン」になっていますか？それとも又、洗たくしたいニッポンですか？尋ねてみたいです。

今日は龍馬さんの生誕をお祝いするため、はるばる江戸からやって参りました。生家跡には、たくさんのお花がたむけられていました。令和となった現代でも、あなたの功績は高く評価されています。今回、私はあなたのことをもっと知りたくて、事前にたくさんの本を読みました。あなたが残した140通近い手紙も、架空のヒーローだった龍馬さんがリアルに存在したのだと手紙を読んで感じました。あれらの手紙は、個人宛ではあるけれど、実は後世に、あなたが生きた。今、を伝えるため、本当は多数宛に書いたものではないかと思えてなりません。今の世は、龍馬さんが描いた「ニッポン」になっていますか？それとも又、洗たくしたいニッポンですか？尋ねてみたいです。

今日は龍馬さんの生誕をお祝いするため、はるばる江戸からやって参りました。生家跡には、たくさんのお花がたむけられていました。令和となった現代でも、あなたの功績は高く評価されています。今回、私はあなたのことをもっと知りたくて、事前にたくさんの本を読みました。あなたが残した140通近い手紙も、架空のヒーローだった龍馬さんがリアルに存在したのだと手紙を読んで感じました。あれらの手紙は、個人宛ではあるけれど、実は後世に、あなたが生きた。今、を伝えるため、本当は多数宛に書いたものではないかと思えてなりません。今の世は、龍馬さんが描いた「ニッポン」になっていますか？それとも又、洗たくしたいニッポンですか？尋ねてみたいです。

今日は龍馬さんの生誕をお祝いするため、はるばる江戸からやって参りました。生家跡には、たくさんのお花がたむけられていました。令和となった現代でも、あなたの功績は高く評価されています。今回、私はあなたのことをもっと知りたくて、事前にたくさんの本を読みました。あなたが残した140通近い手紙も、架空のヒーローだった龍馬さんがリアルに存在したのだと手紙を読んで感じました。あれらの手紙は、個人宛ではあるけれど、実は後世に、あなたが生きた。今、を伝えるため、本当は多数宛に書いたものではないかと思えてなりません。今の世は、龍馬さんが描いた「ニッポン」になっていますか？それとも又、洗たくしたいニッポンですか？尋ねてみたいです。

11月2日 27歳 女性

11月5日 5 72歳 女性

11月9日 A・Y 33歳 女性

11月12日 N・K 32歳 女性

11月12日 N・K 63歳 男性

11月12日 M・K 9歳 女性

11月12日 K・Y 75歳 男性

11月12日 N・K 64歳 男性

11月12日 T・H 64歳 男性

11月15日 N・T 57歳 男性

11月15日 N・T 57歳 男性

11月15日 N・T 57歳 男性

11月15日 N・I 42歳 女性

11月15日 N・I 42歳 女性

11月15日 N・I 42歳 女性

11月15日 N・T 57歳 男性

11月15日 N・T 57歳 男性

11月15日 N・T 57歳 男性

11月16日 T 65歳 男性

■「“維新十傑”～奈路道程イラスト展～ 好評につき会期延長」

特別展「維新十傑 一創造・行動・志」展の関連企画「維新十傑 ～奈路道程イラスト展～」は、好評につきまして2020年1月14日まで会期延長となりました。

作品は「維新十傑」10点、「龍馬をめぐる女たち」5点、そして「土佐の風景」3点の合計18点を展示しています。

奈路さんの黒を基調としたイラストは、白い壁面にくっきりと浮かび、ところどころに入っている差し色が、さらに画面を際立たせています。

「十傑」の10人は、それぞれの微妙な仕草や目線の表現で人物像が描かれており、奈路さんが意図された、偉人をより身近な人物に感じていただけるのではないのでしょうか。また「龍馬をめぐる女たち」は、“乙女”は思慮分別ある姉としての優しさを、“お龍”はきりっとした粋な感じを、“千葉佐那”は女剣士としての実直さと美しさを、“平井加尾”はかわいらしさと芯の強さを、そして“寺田屋登勢”は落ち着いた懐の深さが、イメージとして描かれている印象を受けます。

「土佐の風景」では、“足摺岬”は、黒で描かれた岬に空と海の2色の青が、灯台の白さとお遍路さんを引き立たせており、青い空に聳える“高知城”の坂道には、行きかう男女が描かれ郷愁を感じます。“路面電車”は、はりまや橋のアーケード前を走る原型の車体に、緑・クリーム・小豆色の3色が描かれ、時代の穏やかさと温かさを醸しだしています。景色は人物とはまた一味違った奈路さんの内面を描写している印象で、更に違う景色のイラストも見たくになります。

お客様からは、「奈路さんのイラストがアートのでとてもよかった」、「かわいらしくてポストカードが欲しい」等の感想も寄せられています。

11月17日に開催された龍馬まつりの《奈路道程さん、似顔絵コーナー》では、50余名の参加者が奈路さんに似顔絵を描いて頂き、1人を4～5分程度でサラッと描いていく画面に大興奮。次々に描きあがってゆく似顔絵に、皆さん笑顔がこぼれていました。県外から来館された女性の方は、「奈路さんの作品も見られ、似顔絵も描いて頂き、握手もして頂けて、本当にうれしいです!」と感激されていました。奈路さん曰く、「大勢の方と一人一人顔を合わせられる事(しかもじっくり)は、似顔絵描きの特典とっております」とおっしゃっていました。



似顔絵描写風景

最後にほっと和んでいただける空間“海の見える・ぎやうらい”に、また一つ新しい風が吹いた気がします。

この機会にお見逃しのないようお楽しみください。

中村 昌代



展示風景「維新十傑」



展示風景「龍馬をめぐる女たち」



展示風景「土佐の風景」

入館状況

2019年12月20日現在
(1991年11月15日開館以来 28年35日)
◆総入館者数 4,275,425人
◆グランドオープンまで 3,936,760人
(2017年4月1日～2018年4月20日休館)
■グランドオープン(2018年4月21日)以来 338,665人

編集後記

すっかり生活に馴染んできた感のある令和の年号ですが、早くも2年となりました。年末が近くなると、年末年始の開館についてのお問い合わせを多くいただきます。当館は年中無休、年末年始も開館しています。10年間続いた元旦の恒例行事「龍馬に届く年賀状」配達日も去年で打ち止めとなり、例年とは少し違う新年を迎えることになりました。子年。十二支の最初です。干支が生活に密着した時代であれば、これも心機一転となったのでしょうか。職員一同、心新たにお客様をお迎えいたします。(た)

館だより“飛騰”第112号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏
〒781-0262 高知市浦戸城山830
発行日 2020(令和2)年1月1日 TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015
発行 公益財団法人高知県文化財団 http://www.ryoma-kinenkan.jp
高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休
入館料 一般500円(企画展開催時700円)
高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。
〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで



奈良県東吉野村
坂本 基義

私のテーマ

天誅組を語り継ぐ ～終焉の地・奈良県東吉野村から～

今や、坂本龍馬が教科書から消える？といわれる時代である。もちろん、天誅組を研究する公的機関はほとんどない。あつたとしても小さなゆかりの市町村と天誅組の軍令にある「一心公平無私」に心を寄せるファンが組織する民間団体である。

天誅組シンポジウム

天誅組では土佐脱藩の志士が17人と最も多い。土佐四天王の一人・吉村虎太郎、那須信吾、安岡嘉助、池内蔵太、島村省吾、生き残って明治時代に活躍した石田英吉など多士濟々である。

2013年11月、天誅組の変から150年を契機に「天誅組をマイナーからメジャーへ!!」を合言葉に奈良県内天誅組ゆかりの五條市・安堵町・津川村・東吉野村の四市町村が連携して「天誅組シンポジウム in 東京」をスタート、東京で5回、奈良市で1回開催した。2019年9月28日、「天誅組シンポジウム in 高知」も天誅組を語り継ごう、今回が第7回目である。天誅組総裁・吉村虎太郎の生誕地・高知県津野町には最大の協力をいただき、高知県内外から350

人近くの参加を得て盛大に開催された。幕末の若者たちの「志」を共有しよう。

シンポジウムの冒頭、津野町立葉山中学校の松本陽莉さん(3年)が「天誅組シンポジウム in 高知」の趣旨を力強く朗読してくれた。

『今の世に天誅組の志を知る人はいかほどあるか。今を去る百五十有余年前、自らの利益を一切かえりみず、幸せな国、明るい家庭、豊かな人々、そして笑い声の絶えぬ故郷を夢見て立ち上がった若者達があった。それは暴挙かも知れぬ。これを迎え討った諸国の藩士達、国の秩序を守ろうとした人々である。共に未来を見据えて、深山幽谷に命を落とし果ては獄舎に繋がれて斬罪された。こんな人々の血と汗と涙があつて、今我々が幸福を享受している。』

歴史とは「いきさつ」だ、いきさつを知らずして未来はない。今も奥大和では彼らの功を忘れず、碑に香華を手向ける老人らが居る。こんな記憶もいつまで伝えていく事が出来るのであるか。知ってほしい、聞いて欲しい、そしていつまでも伝えてほしい。自らを犠牲にしても人々を幸せにしたいと無償の愛を捧げ尽くした若者たちの事を……。 (奈良県立大

学客員教授・岡本彰夫氏)と、また、同町立東津野中学校3年の馬場 巧君・池 愛奈さんは、東吉野小学校と中央小学校の交流学習での体験発表の中で「大きくなったら吉村虎太郎が天誅組志士たちの眠る東吉野村を訪ねたい」と話した。会場は三人の中学生の発表に共感の大きな拍手を送った。

平成26年から東吉野村と津野町が小学生の交流を始めた。東吉野村の子どもたちが吉村虎太郎や坂本龍馬の銅像に出会い大きな感動を覚えて帰ってくる。また、天誅組ゆかりの地の盟約を結んでいる愛知県刈谷市へも歴史学習に出かけ、学校の学習発表会で天誅組の研究や劇を発表している。

現地に行つて歴史的事象に思いを馳せるということは子どもたちにとって大変意義深いことである。坂本龍馬記念館が取り組んでいる「拝



津野町で開催された「第7回天誅組シンポジウム in 高知」の様子= 2019年9月28日

啓龍馬殿「夏休みよりようま工作教室」「夏休み子どもフォーラム」「学芸員の出前授業」などは、歴史を楽しく学ぶことができる当を得た活動である。

「百聞は一見に如かず!!」これらさまざまな取り組みは子どもたちに大きな影響を与えることは疑うべくもない。「天誅組を語り継ぐ」とは、次代を担う子どもたちに、将来への希望やしとなる「大いなる志と希望」を語り継いでいくことにはかならない。

「瑞西で龍馬さんと共に書に遊ぶ」

現代龍馬学会副会長 竹内 土佐郎



スイスからのお招き

それは、二〇一八年の四月頃であった。

在日本大使館・文字アートグループの主催による「一日本からスイスから」書・文字の世界」展に、スイス在住の三木佐和子氏からは非にとお招きの電話をもらった。展示会の開催期間は、二〇一九年六月十三日から八月二十八日迄、場所は、ベルンのスイス日本大使館広報センターである。その企画内容は、それぞれの出品による日本の書と現地スイスの書とのコラボレーション・坂本龍馬についての講演会、そして書のデモンストラーションを行って欲しいということであった。なにさまで突然の電話であったので、即答はできず少し時間をもたせて考えた末、龍馬さんと一緒に行かせてもらい書の揮毫には、龍馬の句いのする文句にしようと心に決め「よっしゃ」とスイス行きを承諾した。



スルツベルゲル・三木佐和子氏は、私の教え子である。彼女は、スイスに渡って四〇年余り「外国語としての日本語」教師として大学、高校の他、市民大学講座などで教鞭をとってきた人物である。現在は、日本大使館文化センターで「日本語と書道・文字」文化コースの講師をしている。スイスにおける日本語教育の推進の功績を認められ、平成三十一年度に外務大臣表彰を受賞されている。

書・文字の世界

この展覧会の目的は「書・文字の世界」と題し、教師、家族、親日家、日本の文化、スポーツに興味のある方々、教育機関や学校の教育陣など広く公開するものであった。

龍馬の講演は、予め話す原稿を用意しインタナショナルの英語はスイス人も解るらしく、その原稿を三木氏の息子さんに翻訳してもらい、それに基づいて話すことにした。

講話は、坂本龍馬記念館発刊の冊子を参考に「龍馬とは、どんな人」と題して龍馬の生いたち、江戸での剣術の修行、河田小龍との出会い、龍馬の脱藩、開明的な考えの勝海舟を訪ねる、薩摩藩の西郷隆盛と会う、薩長同盟の成立、船中八策を



提案、大政奉還なる、坂本龍馬・中岡慎太郎暗殺される等の項目を掲げ、封建的な幕藩体制から幕末維新という新しい国づくりに奔走した龍馬の姿を話す。龍馬をわかっている人、龍馬を初めて聞く人、龍馬をあまり知らない人など五〇人以上の視聴者を対象

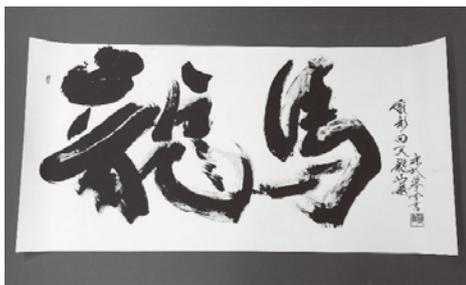
に、パワーポイント日英語作成、二面スクリーンで重要人物の映像を見せての講話をさせてもらった。これには一度もハーサルをしなかったにもかかわらず、翻訳者の三木さんとは呼吸もピッタリと合い、スムーズに終わったのはお陰様で良かったと思った。坂本龍馬記念館には、写真、資料の提供、アドバイスなど頂き深く感謝をしている。

書の方では、スイスは文字を書くのに硬筆のペンを用いて言語を花文字の書にする。日本では、スイスの硬筆と違って柔剛の弾力のある性質の毛筆を活かして緩急と抑揚を駆使し、温もりと優しさのある柔かい線、力強く剛胆な線など様々な線の文字を情感に任せて表現することができ。書は、その人の意志を伝達する大切な魂なのである。

龍馬の魂を書に

このコラボ展には、全紙、半切、半切の二分の一、色紙など含め数十点の作品を出品させていただいている。時に龍馬の魂を私なりに感じながら書にさせてもらった作品として「心如鐵石」(こうだと思つたら心は、石のように固く実行する龍馬)、「靈峰富士

山」(心は大きく、日本は勿論のこと世界を見渡す龍馬)、大勢の皆さんが見守ってくださる中で、デモンストレーションとして畳四枚位の画仙紙に「維新回天龍馬」(新しい時代に変わる龍馬)は、力強く胆力を込めて揮毫させてもらった。その後この書展は、入観者も多くあり期日を延期して開催されたと言う。



慶応三年十一月十五日悔しくもその命日がなければ、その後亀山社中を改名し商船をして、世界の海を巡ってこのスイスの国へも来ていたかもしれない。

写真：在スイス日本国大使館提供

「ほれ話」 犬歩棒当記(四十) 一 ロマンティックな史跡

宮川 禎一

史跡とはかつて起きた重要な歴史事象を偲ぶ場所だ。関ヶ原の古戦場跡や池田屋騒動跡など、各地に史跡がたくさんあるのが日本のよいところだ。なかに恋愛に関する史跡もある。龍馬とおりがようが新婚旅行で登った霧島山などは龍馬ファンが二人の足跡を追体験するのに格好の場所だ。

最近、京都市西京区大原野小塩町にある十輪寺という在原業平ゆかりのお寺に参拝したが、本堂の裏山の尾根上にある「塩竈」の遺構を見て、深く思う事があったのだ。

この寺に関わる在原業平の和歌は
大原や 小塩の山も けふこそは 神代のことも 思ひ出づらめ

いつもの「心あまりて言葉たらず」な業平様の歌だが、大意は「京都西郊の大原野、小塩の山にいる私は、今日こそは神代のこととも思い出すのですが…」。なんのこっちゃ？である。意味不明だ。しかし何かが仄めかされている。この歌にまつわる後世の物語がある。

華麗な女性遍歴のすえに在原業平が晩年隠棲したとされるのが十輪寺だ。その北数キロのところに藤原氏の氏神を祀る大原野神社がある。そこには藤原氏の高貴な女性が祭祀のために定期的に参拝に訪れる。時の二条帝の后である藤原高子は実は業平の元恋人であった。十輪寺の業平は高子が大原野神社にお参りする日に限って塩竈を

焚くのだという。南の山に紫の煙がたち昇るのを彼女が神社から見つけて「まあ」と何かを感じるのだ。「神代のこと」とは遠い昔の恋の思い出のことであろう。そんな王朝貴族の恋愛譚をもとに近代になつてから塩竈が復元されたのだ。いやはや、こんなロマンティックな史跡があったとは…。

考古学的にはこの付近から九世紀頃(業平の時代)に緑釉陶器を焼いていた窯跡がいくつも発見されている。平安京に住んでいた人たちにも西南の方角にたちのぼる煙が見えたはずだ。「あれは業平様が元カノに想いを伝えるために焚いている塩竈の煙だよ」などと噂をしたかも知れない。かくも日本は「史跡と物語の国」なのである。



京都西山の十輪寺にある「塩竈」(汐水を煮つめて塩をつくるかまど)

第3回 龍馬のひろば

「龍馬のひろば」へ ようこそ！

今回は「龍馬がゆく」の大好きな場面をあげてみましょう・・・という標題でした。「龍馬がゆく」なら、会員さんからの原稿が殺到するだろうと予測していましたが、ところが、名作には感想も出しづらかったということなのでしょう。原稿の集まりが悪いということで、急ぎ私の感想もまとめてみました。次号以降へのコラム欄へも掲載したいと思いますので、まだお手元に原稿のある方々はぜひとも事務局あてにお寄せくださるようお願いいたします。(締切り2月14日)

現代龍馬学会 会長 宮 英司

北海道滝川市 堀 美幸

もし龍馬さんが

近江屋で暗殺されず人生をまっとうしていたら

歴史は変わっていたでしょうね

北海道の開拓に乗り出していたら

北海道は変わっていたと思います

函館戦争は

なかったとしたら

どんな北海道になっていたでしょう

うね

大政奉還を終え

徳川に使えていた

武士達はあなたを

憎くて仕方がなかったでしょう

その武士の行き場を

あなたは考えていたし龍馬さんが

居なくなった事に

あなたが予想していたとおりに

京都は焼く東北全般に

明治維新の官軍が

征伐に行く事もなく大勢の人が亡

くなる事はなかった

と私は勝手に思っています

もう少しで歴史が変わった

11月15日がきますね残念で残念で

仕方がありません

龍馬さんがあの日を迎えなければ

日本北海道の歴史ももっともっと

良い方向に変わっていたと思っ

ています

龍馬さんに会いたかったです

くよくよしちやいかんぜよ
と笑う龍馬さんが目に浮かびます

「龍馬がゆく」の 思い出

高知市 宮 英司

それが、龍馬の最後のことばになった。言いおわると最後の息をつき、倒れ、なんの未練もなげに、その霊は天にむかって駆けのぼった。

天に意思がある。

としか、この若者の場合、おもえない。

天が、この国の歴史の混乱を收拾するためにこの若者を地上にくだし、その使命がおわったとき惜しげもなく天へ召しかえした。

この夜、京の天は雨気が満ち、星がない。

しかし、時代は旋回している。若者はその歴史の扉をその手で押し、そして未来へ押しあけた。

「龍馬がゆく」を読んだ仲間うちでは、よくこのラストシーンが話題にのぼる。特に、「天が、この国の歴史の混乱を收拾するためにこの若者を地上にくだし、その使命がおわったとき惜しげもなく天へ召しかえした。」の部分と「しかし、時代は旋回している。若者はその歴史の扉をその手で押し、そして未来へ押しあけた。」は、何度読み返してもグッとくる。坂本龍馬が、稀代の歴史家・司馬遼太郎さんによって幕末の英雄に祭りあげられた名文だと

思う。

実は、自分が仕事を始めた頃だから、まだ坂本龍馬記念館の建設構想が持ちあがるよりも前の段階。桂浜の龍馬像を一心に見あげる東北の青年と出会った。聞けば、「龍馬がゆく」を読んで感激して、そのまま夜行列車に飛び乗って龍馬像を拝みに来たという。龍馬ファンが集いなどでも時々似たような話を聞く。他に何もなかったの、当時の龍馬像は、それくらい大きな役割を果たしていた。

教え子のO君。高知の会社に勤めている。中学3年生の時には進路が決まらず、お家の方はもちろん、本人もかなり焦っていた。休み時間に龍馬の話になった。彼には教科書程度の知識しかなかったが、図書館で借りた1冊の本のおかげで龍馬に目覚め、「龍馬がゆく」を手にするほどになっていった。受験勉強にも力が入り始め、希望の進路を勝ち取ることができた。数年後、社会人になった彼と同窓会で会った。すっかり龍馬通になっていた彼と「龍馬がゆく」について話し込んだのが懐かしく思い出される。彼の口から「龍馬がゆく」のラストシーンに痺れています。」という言葉が飛び出して、大いに話が弾んだことだった。

そういうえば、長男が在籍して

いた小学校の「一日先生」の授業をしたこともあった。迷わず「龍馬」を取りあげた。わずか40分くらいだったが、子どもたちはよくついてきてくれた。1学期の6年生には少し難しかった。たどるうちに、「龍馬がゆく」の紹介もしたけれど、子どもたちにとどくくらい届いただろうか。とまれ、高知で暮らす子どもたちには、あらゆる機会を通じて龍馬の生き方を伝えるべきだと思ふ。そして、龍馬の基本がマスターできた子どもたちには、ぜひとも「龍馬がゆく」を紹介したいと考えている。そうすることで、一人でも多くの子どもたちが歴史の扉を押しあけるようなパワーを身につけてほしいと願っている。

大きくとらえると、坂本龍馬記念館は「龍馬がゆく」のストーリーを体現した建物ではないか...と思ったりする。龍馬の各種のステージ、大きな業績の紹介、出合いの達人ともいわれるほど多くの人々の写真...。これからも龍馬記念館と「龍馬がゆく」から様々なことを学んでいきたいと思ふ。

高知県立坂本龍馬記念館・
現代龍馬学会

〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL (088) 841-0001
FAX (088) 841-0015
mail: gendairyoma@kochi-bunkazaidan.or.jp